

アジア現地実習(ベトナム)参加レポート

国際交流学部 国際交流学科2年

1.コミュニケーションは語学力ではなく、オープンマインド!

- フェ大学の友人とのコミュニケーション

今回の海外実習を通して、私は言語が人とのコミュニケーションに思ったより大きな障害にならないということを実感しました。実習を始める前は、言語の壁で、もしかしたら彼らとの親密度や情報交換の妨げになるのではないかと心配していました。しかしこの懸念は実習が進むにつれて次第に解消されました。その理由は、休憩時間に突然始まったカラオケの時間や、日本のゲームアプリで一緒に笑ったり騒いだりする過程で、言語以上の交流が可能であることを体感したからです。この経験は、異文化への理解と受容的なマインドが言語的なコミュニケーションよりも重要であることを教えてくれ、言語の壁を越えることができる人間的なつながりと理解の価値を再認識させてくれました。当初の不安感は、今ではベトナムでの大切な友情に変わり、このような縁は今後の私の人間的な成長に大きな財産になると思います。



- 日本の友達とのコミュニケーション

もう一つ感じたことは、団体生活におけるコミュニケーションの大切さです。今までの私の旅行は個人旅行が全てで、7人で同じ宿、同じスケジュールをこなす経験は初めてでした。誰が先にシャワーを浴びるか、翌日何時に起きるか、観光地で何をかうかなど、些細なことひとつひとつ移動するメンバーが異なり、全てが相談の上で行わなければなりません。私はこのような過程の中で、自分が他人を思いやり、調整する協調性が不足していることを痛感しました。そして10日間という短い期間でしたが、些細なことを変えながらそれを修正していこうと努力しました。このように今回の実習は、単に異文化を経験することを超えて、自分の性格上の不足点も気付くことができた重要な経験でした。

2.ベトナムのレジリエント方式

次に、ベトナムは、植民地時代という苦い歴史を持っているにもかかわらず、その時代の文化的遺産を見事に保存し、ベトナム独自の方法で再解釈し、新たな価値を創造している点が印象的でした。特に、バインミーとベトナムコーヒーでこのような変化の例を見ることができました。ある日、フェ大学の友達がバゲットを買ってくれたのですが、それは私が今まで食べたバゲットの中で一番美味しかったです。なぜこんなに美味しいのか気になって調べてみると、ベトナムがフランスの植民地であった時代に、フランスからコーヒーとバゲットを受け入れ、バゲットの製造方法がその時期に発展したことがわかりました。バゲットは「バインミー」という形でベトナム化されて生まれ変わりました。また、ベトナムはフランスから導入されたコーヒーをベースに独自の製造・サービス方法を開発しました。現在、バインミーとベトナム式ドリップコーヒー、そしてエッグコーヒーは、ベトナムを代表する飲み物として世界中で大きな人気を博しています。このように、ベトナムは過去の痛みを消そうとしたり、否定するのではなく、それをよく保存し、変化させて新しい価値を創出するレジリエントな方法を見せています。これは、日本や韓国を含む他の国々が学ぶべき重要な教訓だと思いました。



3. 国際機関の業務に関する知識の向上

最後に、私は今回の国連訪問を通して、これまで漠然としか知らなかった国際機関の仕事を具体的に知ることができました。その中で最も印象的だったのは、環境問題が単に自然破壊にとどまらず、社会的な問題にもつながるということでした。例えば、地球温暖化により海水が河川に混ざり、ベトナムの漁民が生計に大きな打撃を受け、その結果子供たちが人身売買に巻き込まれ、深刻な社会問題に発展している事例があります。この事例に対し、国連が単純な救援活動や国際紛争の調整にとどまらず、



一見全く関係ないように見える問題間の交点を見つけるためにどのように注意を払っているのか、また環境問題が単に自然を保護する次元を超え、いかに人間の生活の質に直結する重大な問題であるかを知ることができました。それだけでなく、社会問題の定義から国連が抱えている現実的な問題、国連が目指す価値観や哲学的問題に至るまで、様々な領域でどのように活動しているのかを直接見て感じることができる貴重な機会でした。

このようにベトナム実習は私にとって、出発前よりも広い視野で世界を見ることができるようになりました。機会があれば、次の学期もこのような実習授業を通じて自分を成長させる貴重な経験をしたいと思いました。

このようにベトナム実習は私にとって、出発前よりも広い視野で世界を見ることができるようになりました。機会があれば、次の学期もこのような実習授業を通じて自分を成長させる貴重な経験をしたいと思いました。

